



薩摩藩英国留学生記念館  
開館 10 周年記念

「旅立ちの地」エッセイコンテスト  
準大賞

「南日本新聞社賞」

幸齢者(高齢者)への旅立ち

清水 恵子 大島郡

「ひよっこりひよたん島」と聞いて「何？それ」と思われる方も少なくないだろう。やがて、半世紀以上も前になるのか、一九六四年、東京オリンピック開催と同じ年にNHKの子ども番組として放送が始まった奇想天外な人形劇である。火山の大爆発で本土から切り離されたひよたん島を舞台に、島に残された住民と個性的な珍客たちが巻き込まれる大冒険を描いた内容であった。「波をチャプチャプチャプ、かきわけて♪」とテーマソングも、ばっちり歌えるのが自慢と言えば自慢。

番組が終了して、大人になっても私は島というものに関心とあこがれを抱き、ついには神戸から島に嫁いだ。嫁いだ島は鹿児島県の「沖永良部島」海がソーダー水のように。えらぶゆりは清楚。農道では、ヤギの親子がおいしそうに木の枝から葉っぱを食べる姿がなんとも可愛く新鮮であった。

近くには、「ウジジ浜」という自然遺産があった。

波によって削られた様々な形の奇岩群の合間から朝日が昇り始めると、思わず手を合わせパワーを頂ける場所でもある。そこは一八九〇年、カナダの帆船が台風で遭遇し、乗組員は島の先人たちに救助され温かい介護を受けて無事にカナダへ帰国したという歴史があった。一一〇年を記念した二〇〇二年には町民劇としても公演し、私はカナダ帆船の船長夫人を演じた。ウジジ浜には、これを記念した帆船型モニュメントが設置されている。

「海上の道」「道の島」と呼ばれる南西諸島周辺の海は、外国船をはじめ多くの船が往来していたという。長い歴史の中では、この小さな島で起こった出来事かもしれないが、先人たちの国境を越えた博愛の精神がカナダと沖永良部島に「心の架け橋」を架けたという「宝」は子や孫たちに伝えていかなくてはならないと、常々思っていた。

私たち夫婦は年の初めの旅行が恒例となっており、今年「甕島」と決め、途中、いちき串木野市羽島にある薩摩藩英国留学生記念館に寄った。

激動の幕末、薩摩藩の未来のために密命を受け、英国留学に旅立った十九名の若き侍たちの活きた証をDVDに加えてわかりやすく説明して下さいた女性スタッフのお陰で、ここを離れたくないと感じるほど、胸に響く場所であった。閉館時間も気になり、素敵なレストランにも後ろ髪ひかれる思いで出口に向かおうとしたところ、図書コーナー

に関係者であろう男性がいた。初対面で自分から話しかけることはないのだが、私の座右の銘は一期一会であり、出会いを大切に、また出会いによって生涯、学びたいと考えていたので、ラインを交換させてもらった。きっとこの記念館が「旅立ちの地」であることが私の背中を押してくれたのかもしれない。功を奏してか、その方のご縁、つながりはとても不思議なものであった。何度かラインでそれぞれの地域の近況報告をしていたのだが、年々人口が減少していく沖永良部島の子どものために、もっと読み聞かせの大切さを学ぶために私は図書館ボランティアとしての認定を受けた。

前々から八島太郎先生の作品が好きで推奨していきたくて思っていたが、なんと、その方から八島先生をご存知な方と繋いで下さり、私は直接詳しいお話を聴くことができた。そしてこの夏、私はふたたび薩摩藩英国留学生記念館を訪れることができた。心残りだったシーフードカレーをご馳走になりながら、話題豊富な方々と心地よい時間を過ごす中で、ふと思った。旅立ちには、若さではないと。歳を重ねても、今というスタートを感じることできたら、それが旅立ちなのだ。私も高齢者ではなく幸齢者に向かつて好奇心を忘れず、子や孫のために島の文化や歴史という「宝」を繋げられる人間になろうと吹上浜からウジジ浜に向かって誓った。